「中京財界史」の中の「二葉御殿」

作家・城山三郎が書いた川上貞奴と福沢桃介

作家・城山三郎は「中京財界史」で貞奴と桃介の事も書いています。特に貞奴に関してはその強さに魅力を感じていたらしく、生前、あるインタビューで「僕に女性を書く力があったら書いてみたいねぇ。」と語っています。二葉館所蔵の「中京財界史・下」（杉浦英一著　中部経済新聞社発行）より一部抜粋して紹介します。（書名変更『創意に生きる　中京財界史』／文春文庫で出版されました。）

中部経済新聞社刊

「二葉御殿」

松永を迎えてからは、二葉御殿も一層にぎやかになった。桃介自身は、そこを双葉居と名づけていたが、和洋折衷の堂々たる建物のため、「二葉御殿」という呼び名の方がふさわしかった。女主人、川上貞奴が極端な潔癖家で、掃布も一拭き毎にバケツの水を代えさせるといったやり方のため宏壮な御殿は隅から隅まで、いつも美しく拭き清められてあった。（一一〇頁より）

中略

芝居好きの貞奴は、川上児童劇というのをこしらえて、二、三回御園座で公演したこともあったが、「二葉御殿」の常連で、この貞奴を中心としてよく素人芝居もした。貞奴自身は天下の名女優であったにしても、その他大勢がずぶの素人なのだから、大変な芝居であったらしい。何しろ、貞奴の相手役の桃介そのものが、覚え性が悪くてセリフが暗記できず、客席から見えないところに大きな字でセリフを書いて張っておき、それを見ながら芝居をした、というのであるから、大体の様子は想像できる。それでも結構、彼らはたのしんだらしい。（一一一頁より）

詩人・金子光晴と作家・牧野吉晴

―よみがえる白壁ゆかりの文士たち―

大正時代から昭和のはじめにかけて白壁近辺には文学者が多く居住していました。同人誌「青騎士」の詩人たち、そして作家になる前の牧野吉晴。そこへ詩人・金子光晴も訪れました。「文化のみち」辺りの当時の様子がよみがえってくるような随筆、金子光晴著『どくろ杯』と、牧野吉晴「閻魔の前で」から一部紹介します。

中央公論社刊

金子光晴『どくろ杯』より抜粋

オイデマツ、と名古屋の牧野からの一本の電報をいのち綱のようにその日のうちに片道の旅費を借りあつめて、夜行列車で東京をあとにしたのも、この機を外すのを懼れるあまりであった。牧野の家は、市の場末の清水町というところにあって、へいつくばったような低い平家ばかりの、むだなあき地の多い家つづきの一軒であった。牧野の父は退職の陸軍騎兵大佐で、いかめしい軍人髯を生やしていたが、無口で、好人物であった。

中略

名古屋城のみえる街道のふきさらしの、車屋台のどて焼店につれていくと、彼女は、濃厚な名古屋味噌で煮込んだ芋や、コンニャクを、猫舌らしくさめるのを待っては、がつがつとむさぼり食った。勝彦と私は、顔を見あわせては、尼の側頭骨の張った坊主頭と、こめかみのいそがしくうごくのを眺めていた。この旅の第一の宿場、名古屋での一ヶ月の逗留は、なにごともないということにつきていたが、旅のもたらす開放感までも、東京での悲惨が尾を曳く憂愁のおもいでおしつぶされていた。

牧野吉晴『閻魔の前で』より抜粋

小学五年の秋、私は六原から名古屋の祖母の家に預けられた。中学校へ入る準備のためだった。祖母の家は通称寺町といった東区小川町の常徳寺という日蓮宗の寺の境内にあった。もと庵寺だという話で、奥庭が墓場に突き出していて、どこの部屋の窓をあけても石碑が見えた。

中略

病気が全快してまもなく私は、仕上げた三十号のカンバスを担いで東京へ帰ったが、すぐその翌日、急に故郷へ帰りたくなって名古屋へ発った。八月三十一日の夜で、翌日、家へ着いて両親と話をしていると、とつぜん、グラグラと家がゆれだした。

「地震だ！」「大きいね」

私たちは、庭へ出ようかと身構えた。大正十二年九月一日、関東地方を襲った大地震であった。

中略

新しい年を迎えて、私は、東京がめざましい復興をとげているという噂に、尻をむずむずさせていたが、三月へはいってまもなく、金子さんがふらりと名古屋に現れた。思いがけないことであった。金子さんは、しばらく私の家に滞在して、名古屋の詩人たちと交友を暖めたのち、関西へ行くことになった。

金園社刊

峠 彩三 撮影『金子光晴散歩帖』より

二人の足跡をたどる文学企画展
「詩人・金子光晴と作家・牧野吉晴」
―よみがえる白壁ゆかりの文士たち―

は、2011年2月8日（火）～3月13日（日）まで、文化のみち二葉館で開催されます。ぜひお越しください。

文化のみち逍遥 その四

【旧豊田佐助邸】　東区主税町

「いこい、やすらぎ、ぬくもり」

この家には「いこい＝憩い」の場がある。特に秋から春にかけては和館一階南側の広い廊下と縁側に座って無心になり〝桃源郷〟に浸る。まさに至福の一刻。関東・関西の名石で造られた巨大な靴脱石。見事な作庭による広い庭に異なる三つの灯籠が、池（抜水）を囲むように配されていて、眺めたるや妙。まさに「憩い」の縁側である。

そこでは俗塵からはなれてリラックスできる心の「やすらぎ」が得られる。更にガラス戸上の「無双窓（むそうまど）」を開けると明るい陽光が入り、下の板戸を開けると微風が入ってくる。晩秋の午後、少し風のある時などは座敷に入り障子を閉め、左右開きの「猫間障子（ねこま）」を開け陽を入れる。種々（いろいろ）な形での「ぬくもり」をとり入れ、感じることのできる場である。

この家は全体的には華美・豪壮なものではなく、地味で重厚な造りの家と云われている。週三日（火・木・土）、この家でガイドをしている私達も実感し、それは主（あるじ）佐助氏の温厚・篤実・真面目でかつ生一本な性格からでもあろう。兄の佐吉氏夫人浅子さんから〝主税町の〟と呼ばれて最も信頼が厚く、佐吉氏胸像の製作も佐助氏の言葉で決めたという。

といっても格段に天井が高いこの家は北側の部屋など冬は寒い。「お父さん寒い」という娘の言葉で和館一階北側を二重ガラス戸にしたというエピソードなども佐助氏ならではで、自ら庭に子の為に遊具を造り、親子して遊んだこともある。家庭の中に「ぬくもり」と「やすらぎ」、「いこい」があり、客間と居間の厳然たる区別がなく使われていたということからもこのことがいえよう。

大正末期の家、老朽化は大。この家をいついつまでも大切に残さねばならない、と切に思う。

東区文化のみちガイドボランティアの会　大西一郎

洋館1階

DATA

旧豊田佐助邸

■開館時間
午前10時～午後3時30分　月・金曜休館
■入館無料　■名古屋市東区主税町三丁目8
■TEL 052-972-2780
（名古屋市住宅都市局歴史まちづくり推進室）
■ガイドボランティア在駐日　火・木・土曜日
10:00～12:00 13:00～15:00（随時案内）

書庫様から

二葉館の読書会・文学散歩の日

「二葉館の読書会」メンバー　鈴木裕治

さる12月5日。毎月一度行われる読書会。

この日は番外編ということで、文学散歩と銘打って、参加者の方々と尾張地方を巡りました。

馬島明眼院、金子光晴文学碑、津島天王川公園（野口米次郎銅像）、堀田家住宅、海津歴史民俗資料館、行基寺、治水神社などをマイクロバスで巡るツアー。風のない、穏やかな冬晴れの下、風光明媚な各地の景色に心を躍らせます。

中でも印象に残ったのが堀田家住宅。荒神かまどのある土間や、書院、茶室などが町屋建築の趣深さを物語っていました。

途中昼食で立ち寄ったレストランの食事も美味でした。フナの刺身の弾力ある歯応えと、ウナギの蒲焼きのかりっとした食感に舌鼓を打ちます。

風光明媚といえば、行基寺からの眺めも絶景そのものです。

▲野口米次郎銅像の前にて
金子光晴文学碑▶

まだ残されていた紅葉に、寺内の奥行きのある書院と大庭園の静寂、目の前に広がる濃尾平野の景色は、ただ息を呑むばかりです。

最後に立ち寄った治水神社の夕暮れは、一日の締めくくりにふさわしい、鮮やかな光景でした。

この日持参したデジタルカメラの撮影枚数はゆうに三百枚を超えていました。

手作りのツアー日程、小説や俳句、短歌などが織りなす美しい言葉の響き、眼前に広がる光景、そして、参加者の方々の楽しまれている表情…。

城山三郎の著作『部長の大晩年』で、俳人・永田耕衣は「出会いは絶景」という言葉を残していますが、まさにその言葉に彩られた、あたたかな一日でした。

▲行基寺（海津市）より濃尾平野を臨む